

第IV節 自己自身との関わりにおける困難

説教者が問題

- 日曜日の説教という「制度」と同じく問題になるのは、「日曜日に語る人」。
- 自己自身が自己にとって切実な困惑の種！
- 最高度に疑わしいのは、神について語るということを敢えてする人間。
- 単に「いかにそれをなすか」ではなく、寧ろ「いかにそれをなしうるか」が問題。更に問題は、「誰がそれをなしうるか」

説教者の自己同一性の危機

- 説教者は、自己自身の人格にはぴったりしない職務意識を深めるだけ。
- 自分のやっている事の意味を自分ではもはや見抜けなくなっているのに、それをやっている。
- 言葉と実存の間に不一致がある事を、言葉が暴露。
- 説教者が語っている事に言葉そのものが矛盾していることも起こる（第23章説教者の為の罪表第II節罪表詳論）
- この自己同一性の喪失は、結局、自己性の喪失として自己を明らかにする。

司祭の自己同一性の問題を扱った著作

- クルトマルティン・マギエラの小説『リドルとアイヒホルンと他の人々』（1969年、邦訳なし）
- 司祭職の持つ問題
フェルディナント・クロスターマン『明日に備える司祭』（1970年、邦訳なし）
- 福音主義の牧師職に関する同様の労作はまだない。

「説教者が自己同一性を持たないということは、説教者の、神・世界・教会に対する関係が乱されている、と言える。何よりも強調したいのは、説教者と教会との関係が壊れてしまっていること（一般的に

は「全体の教会」、特殊に言えば「個々の教会」)。説教者が、ひとつの教会に属する兄弟姉妹との交わりを持つことなしに生きている時には、説教者自身に何かが欠如している（つまり、説教者は牧会者でなければ自己同一性が欠如してしまう、と言う事か。）教会が説教者の一種の「第二の自己」になるようなことがない所では、説教者の自己そのものに、…、欠如するものがある。教会との結びつきが欠けているということが自分自身の行為との関わりにおける不確かさをつくり出している。…単純な心になりたいと思う者は、ただ多くの兄弟姉妹と共に生きることによる他はないだろう。（情熱としての説教への教会員の参与を〔＜第一章参照＞（p32 最終行から p35 後ろから 4 行目）〕ただ単に説教に対する会衆の期待としてのみ描写することだけではゆるされなかったのかも！）

「説教」という職人芸¹を身に着けていない⇒

説教者が自己同一性を持たない、とも言える。

説教者が説教することを学んだことはないし、今も学んではいない。学ぶべき（という認識があった）なら、説教実習を毎学期毎にしなければならなかった筈²。このような学習過程では、学生は自分が

¹ “「説教という手仕事」と訳しているが、「説教という職人芸」と訳す方が相応しい” 加藤先生 2022/4/12 での発言による。加えて4/26に次のように発言された。「今このことが大事だなあと思うようになってる。英語で言うと **handwork**。われわれの言葉では手仕事。大工仕事で本棚をつくるなど。そのようにも取れるが、この場合は、たとえば漆物をつくる時。素人がつくるのとは違う。まさに玄人の仕事を意味するんじゃないかなと思うようになった。訳したときはそうは思わなかった。素人でも手仕事はできる。でも玄人が身に着けた芸。玄人のわざがあるんじゃないかなと。私自身の方で変わった。翻訳には、このよに、後から変わることが起こる。」

² 文末脚注（19）p617。ドイツの大学神学部、もしくは神学部に於ける説教の学習は、その学校の伝統や教授の考え方によって異なる。もとより、実際に説教を行わせ、その批判をするということをしていないわけではない。しかし、その説教の行為に、著者が言うように集中していないことは明らかであるし、説教の演習は、しばしば聖書学的釈義に傾きすぎて、殆ど聖書学の演習と異なることがない場合も起こる。4/26 加藤先生の発言「ドイツでは礼拝に出た事のない神学部の学生もいる。日本とは異なる。日本の神学生は **教会で教会学校の先生やってる人多いと思う。教会教育をさせられる。分級で話をするし、礼拝でも話をする。子供を軽くみちゃいけない。ちゃんと御言葉を伝えられているかどうか分かる。教会学校の経験を持っているか持っていないかだけでもドイツと大違い。教会学校はアメリカの考え。おもしろかったのは、東ドイツの教会ではサンデースクールという言い方でアメリカのやり方を積極的に取り入れている教会がありました。西ドイツではあったんでしょうがわたしは知らない。そこで際立っているのは信徒が働いていること。」**

語るべきことを学びはしない。学生が自分の使命を果たす言葉を持つほどに成長していないのが通例。「自分の持つ世界像を言葉をもって言い表しうる程に成長していない作家のことを、ドイツでは、“見るだけの人間 Seher”と呼ぶ」(ゴットフリードベン³)。

学生が言葉のうえで説教不能となっている症状の三方向での分析

○普通の教会ではK i n d e r g o t t e s d i e n s t (キンダーゴッテスディーンスト) 礼拝の後。11時から。9時からやってくれる場合も両方ありました。牧師だからとわたしは、子供に説教させられることがありましたけど。信徒が奉仕することはありません。説教はだいたい牧師。教会としては正しいと思う。わたしは信徒任せにしないで牧師がやるべきだという考えですけど。

○学生が実際に説教するのはV i k a r (ヴィカール牧師補) になってから。P r e d i g e r s e m i n a r (プレーディガーゼミナール) 牧師補研修所で、泊りがけで10カ月間実習します。礼拝説教、子供礼拝での説教。お互いの前で説教して、厳しく批判される。神学部を出てからの話。Predigerseminarに行く前の学生。説教はしないということが一般に言える。ヴッパータールに寮拝があったのは特別。

³ ゴットフリート・ベン (Gottfried Benn, 1886年5月2日 - 1956年7月7日) は、ドイツ・表現主義文学の代表的な詩人。ブランデンブルク州ヴェストプリーグニッツ郡(ドイツ語版) マンスフェルト(現プートリッツの一部)の牧師の息子として生まれる。母はフランス系スイス人。当初は父の意向に随って神学・文献学をマールブルク大学、フリードリヒ・ヴィルヘルム大学(現ベルリン大学)で学んだが、その後志望を変更し、ベルリンのカイザー・ヴィルヘルム大学軍医養成大学で医学、生物学を学んだ。1912年に卒業して軍医となり、同年に最初の詩集『モルグ』を発表。医学・生物学的知識を活用したグロテスクな表現でセンセーションを起こした。一時ナチスに傾倒するもその後は反ナチスの態度を取り、1938年に文学活動を禁止される。第二次世界大戦後はベルリンで開業医を営みしばらく沈黙していたが、1948年『静学詩篇』を刊行して復活し一躍世界的名声を獲得。現実から超越した形式・美学を追求し、若い世代にも影響を与えた。1956年、70歳の誕生日の2か月後にベルリンで死去。

第一の方向：

釈義は説教者に言葉を与えて、その言葉を把握しうるようにしてあげることは出来ない。(説教者の)言葉を拡大する事⁴こそ、釈義には不可能。

ヴィリー・マルクセン「釈義はたいていの場合、さまざまの注解書から、入念な仕方で集め、まとめられる。この場合にしばしば、混成化成の方法が用いられることは勿論のことである。ひとつのよい考えがこちらから、あちらからと受け入れられる。諸注解書の固有性、それぞれの概念がすっかりその特色を失い平板化されてしまう。⁵しばしば説教の中で、注解書の考えが、時には釈義の文章そのものまでが現れて来ることがある。… 釈義と説教の間には、橋がかかっているとは思えない。たいていの場合、そうした橋は全く存在しない。この事実は、私には、今日の状況を示す徴候のように思われる。私は不思議に思うのだが、聖書の釈義がのちに有効に用いられるということもないのに、釈義のために注がれているこの労苦は、いったい何だというのであろうか」(『聖書釈義と宣教』 今日的神学的実存双書第59号、

⁴ (安井先生) 釈義のまづい羅列? 「言葉を拡大する」?

(加藤先生) 釈義は専門用語。教授と学生が使う。素人は口はさめない。でも説教は素人に話さないといけない。テキストについて議論している時に、たまたま信徒がいた場合。今、ここで何をやってるんですかと問われてもすぐに説明できない。専門用語が多い。この指摘は正しいと思う。日本では考えられないほど。逆に言えば、日本では、釈義の専門家はそんなに育ててはいない。

○「拡大」の意味は?

(加藤先生) 釈義の世界には黙想の入る余地がない。イーヴァントなんかは聖書学の成果を受け止める努力はしている。だからボーレンさんの態度は、ギリシャ語のテキストも説教演習で使わない。私が机の上に広げていたら、そんなのいらないと学生たちに言われた。

⁵ ○聖書学的な釈義のこと。加藤先生の方が、ボーレン先生よりも積極的に感じる。(加藤先生) そうです。マルクスセン。注解書の固有性が平板化される。ボーレン先生もそのところは考えておられる?

1957年)。「(入念に各注解書から寄せ集められた) ここにある釈義—それは全く釈義などというようなものではない。それ故に架橋作業の基礎を提供することは不可能。説教の危機は、極めて深く釈義の危機なのである⁶」

⁶ ○(加藤先生)ふたつの問題。わたしは東神大で釈義を学んだ。東大でも神田武夫先生がされた。東神大ではドイツの大学とまったく違っていた。いちばん学んだ新約学の山谷省吾先生は信濃町教会の牧師で神学校を出ていない。牧師としての釈義をなさいました。山上の説教を聞いた。主の祈りが登場する。日毎の糧の祈りがある。当時ニコヨンという言葉があった。240円。日雇い人夫の生活でニコヨンという言葉があった。山谷先生がいきなり天に向かって指を二本。「“神様!ニコヨン”という祈りだ」とおっしゃった。みんな笑った。まさにこれは説教者の感覚で、ドイツでは決して言わないと思います。「ニコヨン」という言葉を使うのは説教者の感覚。キリストの言葉を取り次ぐ時に、ニコヨンという言葉があり得るということを示された。小塩先生のコロサイは難しかった。

○説教者としてドイツで新約学で有名な人はひとりもない。ケーゼマンもしない。説教者としてはゲルハルト・フォン・ラート、ヴェスターマン。旧約学者。なぜか。そこには深刻な問題があるとしばしば言われた。

○もうひとつは、ドイツの学生たちは釈義を学びますが、勉強はするが、学生自身の釈義ができない。しないと言っても良いかもしれない。新約学者が権威を持っていたかもしれない。俺はどこにつくかという判断のみ。オリジナルがない。たいへん専門的な研究資料がないといけない。学生たちは持っていない。俺はこの人の立場に立つことしかできない。ユニークな説き明かしはできない。それができるのは黙想、説教のことばを体得していないとできない。日本語に訳して紹介される場合も。神学者としてでなく、説教者としてのパースペクティブが出ていないといけない。

○(戸村)釈義と説教の関わり。なぜ乖離が起こったのか？

(加藤先生)ドイツの大学は学問を重んじる。教会に支配されることはあり得ないと考え。シュライアマハーはベルリン大学の創立に関わった。文学部系の創設にあたったフィヒテは国立大学に神学部はいらないという考えだった。プラグマティックで学問の名にあたらない。シュライアマハーは神学通論を書いて学問に値するとした。しかし実践神学の教授になることを求められても、新約学の教授となった。そこには確かに聖書学はアカデミックという考えがあった。もうひとつは歴史学。さらに礼拝学。スカンジナビアの大学でその傾向が強くなったけど。リタージーを学ぶのではなく礼拝の歴史を学んだ。現実の説教はPredigerseminarにまかせた。アメリカはさらに実践的。自分たちの教会に仕える牧師たちを考えた。大学の神学部と教派立の神学部の違

第二の方向：学生は、聖書テキストを、妥当な組織的連関の中で見る
ことができない。

- テキストがどのような働きをしてきたかという歴史は視野に入って来ない。教会がこのテキストについて、これまで既にどのように考えて来たか、について何も知らない。
- 一種の教義学的無知の為に、**テキストをして教会の伝統と対話させ、そうした対話に於いて、テキストの持つ今日における新しさを認識する**ということができなくなっている（第二十一章黙想について第V節 説教のための黙想について）。
- テキストが歴史を造って来た。場合によってはある教義学的論点形成には、テキストがその原因となってさえいた。釈義も又常に、教義学的伝統によって規定されている。釈義が伝統を圧迫している場合にはそう。
- **教会の中においてテキストが作用を及ぼしてきた歴史と共に、またこれに逆らいつつ、テキストに聞き入ることをしないなら、私が説教者として、テキストを聞くことは決**

い。アメリカでは、ドイツほど実用性と学問性の乖離は起きてない。だが、ドイツでは、「アメリカの神学はレベルの高い学問でなく、専門学校のような」と決めつけることが起こった。○新約聖書学で説教のパースペクティブをつくるというのは無理な考え方。それが正しいかの判断も無理。自分の限界をわきまえることは大事。○ヴッパータールの神学部にいた時、毎日曜日ゲマルケの教会に集った。長老会にも出させていただいた。聖なる丘の上に教会があった。ディートリヒ・ボンヘッファー・キルヒエ学生がいちばんたくさん出席していた。帰って来るとき、皆一緒。黙って聞いてると、学生たちが、「あの牧師はケーゼマンの論文読んでないよな」という判断だった。不幸なことだ。○ボーレンさんの評価は旧約学者の説教が高かった。フォン・ラートの神学。本人も、お弟子さんたちも説教できた。宣教が視野に入っていたから。そして育った人たち。クラウス・ヴェスターマン。

してあり得ない。⁷⁸

- 釈義が学生にとって、言葉を与える助けになり得ないのが通例なのは、学生がテキストの解釈に際して教義学の助けを用いることを知らないから。⁹

⁷ ○福音書成立に将来の説教に用いられますようにという考え方はないという方が正しい。聖書正典論をあらためてやり直す風潮が、わたしがドイツに行った時よりも後の時期にはじまってる。○わたしはルカの福音書というよりもルカの教会という言い方をします。聖書というのは教会の經典として受け入れるべきもの。「教会と言うものを積極的に考えるべきだ」と言うのがわたしの立場。○たとえば竹森先生は英国の学者たちを高く評価する。より教会的な理解だから。かたつむりセミナーでも英国の釈義をていねいに読んだ。ドイツの学者の理解ではなかった。わたしも輪をかけて教会の視点と言うものをはっきりだした。竹森先生もドイツより英国の注解書を買った方がいいですよという言い方をされた。

⁸ ○ひとつの要点は。かつて歴史的理性ということばを使った。歴史とは人間の歴史。人間の可能性によってつくられているという考え方。復活はあらかじめ排除。神の可能性を考えない。歴史における神のみわざ。キリストが神の子であるということさえ言えない。そういうことが背景にあり、それで教会で伝道する経験がありませんから。卒業クラスの授業で。わたしのスピーチをさえぎって一度も礼拝に出たことがない。とかんかんに怒って、次の日曜日出なさいと。学生たちはむしろおもしろがった。

⁹ ○聖書学ではこういう教理はなりたないということを平気です。たとえば復活。1966年に入ってから。国営テレビ。1チャンネルでゴールデンアワーにキリストの復活は事実であったかと2～3時間の討論をやった。国民的な問題になった。キリストの復活の記事は聖書学的に証明できないと。又、ラインラントの信徒大会。わたしも参加した。そこでの議論はわたしたちの教会の牧師は復活は事実でないと学んだ。それなのに復活の説教をする。なぜか？信徒たちの多くの意見は、牧師は大学の学問と違う説教をする。なぜか？そこで、お札を数えるアクションをした人がいた。生きて行くために、というのだ。牧師の給料は良かった。自分の信念に逆らって、(お金のために、生活のために)復活の説教をするなんてことが言われた。○それでもキリストは復活するという集会が開かれた。スポーツの会場を満席にして。神学校の学生に誘われたけど忙しくて行けなかった。復活信仰を争ったことがあった。

¹⁰ (渡邊) 69頁うしろから3行目「歴史の躰き」とは？(加藤先生) 歴史批評、歴史的批判というのはユルゲン・モルトマンの論文に。聖書釈義というのは聖書のテキストに過去の日付をつける。過去の中に日付をつける。IndieVergangenheit datieren (イン・ディ・フェアゲンゲンハイト・ダティーレン)。昔々へとたどる。いつの時代にさかのぼる。過去にこういう言葉遣いがある。それはいろいろな資料から出来上がったと考えるから。最初の資料は口伝で伝えられたものもある。今ある福音書をバラバラにして過去の日付をつけていく。それをモルトマンは批評した。聖書が出来上がっていく過程が重要。IndieZukunft (イン・ディ・ツークunft)。未来に向かって聖書を読むべきだと言った。聖書正典論を考えると重要になった。正典結集というのはこちらに向かってやって来た。各福音書でなんとか資料とか求める。反対に正典として結集してくるプロセスが大事だと言うのがボーレン先生。渡辺善太先生も。そのプロセスに教義学の論争が重なって来る。できあがった正典の解釈をめぐる教義学の論争が起きて来る。そういうことをちゃんと考えるようにした方が良い。○聖書学会でもそういう立場が生まれる。典型的な例、EKK。ギリシャ語のテキストを読んだ後、必ずどう読まれて来たかを書いている。このテキストが今日に至るまでどのように読まれて来たか。場合によっては説教において語ってもいい。だから、ここのボーレンさんの批判は修正されてきているとも言える。

¹¹ ○(加藤先生) 一定のテキストを読む時に、それが2000年の間にどう読まれて来たかをたどるのはたいへん。EKKにもかたよりがある。われわれに何ができるか。プロテスタント教会は自分たちの伝統を持っている。その伝統の中でどう読まれて来たかを学ぶ。改革者の文章を読むことは大事。例えば竹森先生の場合はカルヴァン。ルター派の場合はルター。ずっと前にルーテル神学校で、鷺宮に神学校を持っていた時代。1学期。説教の演習を頼まれた。徳善先生が陪席された。学生の説教を読んだ。わたしは開口一番。びっくりしました。ちっともルーテル派らしくない。徳善先生は、そんなことを要求するのは無理。たまたまルーテル派だと。ルター派という自己主張があって良い。ルターの原典を大切にすべき。基本的信仰告白にもとづくこと。それが誰一人にも見られない。東京神学大学の説教を読むのと同じ。わたしは問題だと思う。ルター派という意識があってしかるべき。○今、東京説教塾の例会で日本の説教者を読んでも同じ。ある人の説教についてこの人は日本の説教者たちを呼んでないと指摘しましたが、植村正久がこのテキストをどう語っていたか。それと対話しなさいということ。ホーリネスでも。中田重治がどう読んでいたか。traditionの問題。受け継いでどう告白するかということ。ひと月にひとつ読んでることで、それで済んでると思われたら困る。中田重治は乗り越えちゃった読まないという簡単な問題じゃない。○わたしは雑種です。日本基督教会と違う。必死になって勉強しますよ。母が日本

第三の方向：学生は、語るという事としての説教が要求する作業がどれほどの広がりを持つものであるか、見当もつかなかった。語る事

に帰って来て積極的に関わった教会が福音派の教会。わたしは雑種の強さというものを身に着けようとした。たいへん。純粹に生きて来た人からは本当に雑種扱いされる。○(安井先生)高倉。若者にアピールがあった。その時代の新しさを持っていた。今の若い人が高倉をどう聞かとか加藤先生が問われた。(加藤先生)ひとつは単純なこと。高倉は植村正久のもとで育ち、師に背いた人。高倉先生が英国にいる時に植村先生がたずねている。師弟が仲直りしたのではないかという観察がある。でも植村と高倉は違う。高倉は自殺したということは大きな問題。でも日本基督教会に大きな影響を及ぼした。われわれに直結する時代の教会を作った。竹森先生も弟子。高倉先生はねという言い方をされた。高倉先生の直系の弟子たちがいた。小塩力、石島三郎。そこで育った人たちがわたしを育てた。熊谷先生も。わたしも福音キリスト教を読んでいる。わたしの場合、高倉は近い。みなさんは世代が違う。旧教派は知らない人たちが、一時代を作った人の説教を読むかに興味がある。○もうひとつは高倉の伝道力。高倉の日記をわたしより興味を持って読んだ方がおられるかどうかにも興味がある。日本の歴史をつくっていくときに、これまでの歴史と対話しながら、これからの歴史をつくっていくので、日本の説教者たちを読みながら、いろいろな問いを投げかけている。○だいたいおもしろいでしょ。大正時代の説教です。

¹² ○(加藤先生)最後にひとつ。ここ(第二章)はボーレンさんの批判です。**批判ってのはとっても大事**です。実践神学概論をやったとき、まず批判ということを学生たちに話した。東神大でも説教を話した時も、説教批判のはなしをした。ところが、ある牧師がなぜして電話をかけてきて、「牧師の説教の批判を学生に教えているのか」とひどく怒っておられた。牧師の説教のわるいところをさがすと思っていた。○東大でカントをやった。カント。三角形というものがある。大人が書いても子供が書いてもどんなにゆがんでも三角形と認識する。どんなにびつでも三角。なぜか。この疑問から純粹理性批判と言う大きな書物を書いた。理性が共通の判断をするから、数学は数学として成り立つ。批判とは自分と相手を認識する。自分と対象と別のところに第三の人がいる。桂枝雀。目の目にもうひとりの自分がいて、自分の落語を「おもしろくねえな」と言っているそういう声を聞く。超越論的。これが神学においても大事。わたしが説教する時も、もう一人いて今日の説教は退屈と批判することもある。そろそろ時間じゃないかね、と「第三者の加藤」と言う者が発言する。ボーレンさんの批判にも、ボーレン先生自身がやっても含まれる。この序論的行程というのは、わたしが原稿を受け取った時にはまだなかった。わたしが受け取ったのは本論の最初のところから。**ボーレン先生はわざわざ追加した。そういう批判をちゃんと学ばないとだめ。**

そのことは注目されていなかった。

- 説教研究がされてこなかった。
- 語る人間に属する諸問題を全く無視していた。
- 説教者自身が釈義と組織神学とを使いすぎることによって、今日の状況が惹き起こしているような逆作用を生んだ。
- 現れてきている諸問題に対する鈍感さは、勇気と幻想力の欠如と同じく、ひどいもの。

道を開き得る四つのこと

第一：

実践神学者が神学緒科解題¹³について講義すること

¹³ [英語] Theological Encyclopedia. 神学諸科,あるいは,神学諸科解題と訳されている,神学のエンサイクロペディアが神学における一部門として設けられるようになったのは,18世紀初頭のことであり,その歴史はそれほど古いものではない.神学研究の細分化に伴い,神学の部門が急激に数を増したため,神学教育の観点から,相互の関連性を明らかにする必要に迫られてきた結果設けられるに至った部門である.従って,現在,神学教育のカリキュラムとして考察されるに至ったものと重なり合う性格を持っているが,何より,神学を,有機的関連性を持つ体系としてとらえようとすることに特徴を持っている.エンサイクロペディアを神学の部門として最初に提示したのは,シュライアマハー(シュライエルマツハー)であると言われる.1804年,彼は,「エンサイクロペディアと方法論」(Enzyklopa "die und Methodologie)という題の講義を行い,後に,これを整えた形で,『神学通論』(Kurze Darstellung des Theologischen Studiums)を出版した.<復> シュライアマハーによれば,神学は,大きく,哲学的神学,歴史神学,実践神学の3部に分けられる.第1部には,弁証学と論争学,第2部には,釈義神学,教会史,教理神学,教会論,第3部には,教会奉仕,教化的活動,指導的活動,教会政治が含まれる.この分類から明らかなように,神学を宗教の歴史的局面としてとらえ,その本質を「絶対依存感情」に求める彼の神学理解が示されている.このように,神学諸科解題は,その神学者の神学理解,神学体系が最も端的に表現される神学部門であると言える.シュライアマハーのエンサイクロペディアが,後に『神学通論』として出版されたように,現代のエンサイクロペディアも,例えば,エバーリングによって『神学研究』(Studium der Theologie, 1977)のタイトルで出版されている.このことから理解されるように,諸科解題は,神学序説(プロレゴメナ)の問題と重複する部分が多い.それぞれの神学の特有性が最も顕著にエンサイクロペディアの取扱い方に見られたことは,ロー

第二：

学習の期間全体を通じて、説教について組織神学的に研究すること。

第三：

聖書釈義の予備演習が説教の地平を明瞭にすること・教会史の演習がもっと説教をとりあげること。教会史の演習が

マ・カトリック神学の諸科の取り上げ方によく表れている。…略…プロテスタント神学の場合、シュライアマハーの後に、ルードルフ・ハーゲンバハ (Rudolf Hagenbach) が示した『神学諸科解題』(Enzyklopa "die und Methodologie der Theologischen Wissenschaften, 1833) が、その後、ドイツの大学の神学部で用いられ、英国、米国にも紹介され現在に至っている。それは、神学を、釈義部門、歴史部門、組織部門、実践部門の4部に分けるものである。釈義部門は、聖書神学部門とも言われ、聖書語学、旧約諸論、旧約釈義、旧約神学、新約諸論、新約釈義、新約神学を含む。歴史(神学)部門は、教会史、教理史を、組織(神学)部門は、教理学、弁証学、倫理学を、実践(神学)部門は、説教学、礼拝学、牧会学、教会政治学、信条学、礼典学を含むものとされるのが一般的である。…略…倫理学を教理学の内部で取り上げる傾向も今世紀になって強い。倫理的価値観の多様化する現代において、倫理学は特に多様な対応を迫られている分野であり、諸科における位置いかんにかかわらず、多面的な対応を迫られていることは言うまでもない。…略…教会のミニストリーの多様化に対応した細分化の必要に迫られている。この点、米国の諸神学校のカリキュラムは充実している。実践神学は、方法論的考察、あるいは、テクニックの紹介に終わってしまう場合も多い。従って、特に、神学諸科における妥当な位置付けが求められている。

…(略)…神学が、単に、体系として統一性と整合性を保つために神学諸科の問題が重要であるというだけでなく、神学が教会の形成を活性化及び宣教活動の推進のために役立てられるものとされるために、神学エンサイクロペディアの問題の重要性が認識される必要がある。わが国で神学諸科解題を最も詳細に取り上げたのは熊野義孝であった。1955年、『基督教講座』の中で、78ページにわたって書いている。彼は、神学諸科解題について、「序論的であると同時に結語的であり、入門を兼ねた卒業の論説とも見られる」と表現している。神学エンサイクロペディアは正しくその通り、入門であると同時に、神学する者、特に、神学教育に当る者が、生涯、内容を整え、時代の要求に則して課題を指摘し続けなければならない学問なのである。わが国でのこの部門の熟成が望まれる。…略…

(出典：『新キリスト教辞典』いのちのことば社、1991)

もっと、説教をとり上げること。学習状況の把握も、第一に説教を手掛かりにすること。

第四：

古典語学習は、一種独特の厳格さをもって必要性を強調されるが、その古典語を使ってすることに関しては、厳格である事に対応して甘い。

- 説教が言葉の教会の中で、二次的事柄としてしか認められていないのが通例。
- 学習が、本来なすべき「言葉の助けを与えること」を為していない。
- 牧師職の諸構造に対して特別に注目されねばならない。
- 将来の職務の為に目的設定を整えることも、神学の学習には不可欠。
- 説教学的に無為に過ごしながらかんたんに過ぐす癖は、大学での勉強を終えても続いている。

⇒

- 説教の勉強をする牧師は少ない。
 - 「日曜日ごとに説教壇から叫ばれているのは、事実上は、いかに準備に欠けているところ多いかがよく分かる説教ばかり」(マルティン・ズヌス「説教の聴き手としての説教者」『牧会神学雑誌』第56号、1967年)
 - レオ・ヴァルターマンは、「残念ながら、少ないとは言えない説教」について次のように語る。「それらの説教においては、説教者が、自分を説教にふさわしいものとしようと努力しているのを認め得るが、その努力があまりにも遅くなされ、その遅すぎた努力が説教を救いもせず、改善してもいないことを認めざるを得ない。数日にわたり、また数時間にわたって配分された努力をすれば、説教者にもっと確信を与え、ゆったりさせ、また我々聴衆は、もっと喜んで説教を聴くことができ、説教に心打たれるようになるであろう」(『説教者へあてた手紙』—『み言葉への奉仕』1967年、第二号)

説教の準備不足

- その原因を、説教作業そのものに於ける熱意不足だけではなく、しばしば、**牧師の説教的教育の継続が根本的に欠けている**点に求められるべき。
- 自分の説教をとにかく準備することだけでは不十分。**一生の間説教する者は、一生を通じて、理論的に説教と対決していくことを続けねばならない**。
- この学問的世界においては、自分自身の行為について釈明を与えることができるような説教でないと、時代遅れになってしまう。
- 黙想集や説教参考書の持つ問題性。

それらは、実際に、中途半端なものを語ってしまうように、説教者を誘惑する。説教者は、いつでも要求されている説教の勉強のための努力を軽んじるようになる。そのために、わたしは、熱心な説教者においても、少なくとも、二十四時間説教するのが早すぎたのではないかと思われる説教を聴かされることを繰り返す。(第11章・説教と引用 第Ⅲ節 付論・他人の説教を用いることについて)

説教の技術的能力の欠陥

- 技術能力の欠陥が、「広範囲には反響を呼び起こさない」という結果を伴う。
- マスメディアが説教の状況を変えて、従来の方法が続けることを許さないほど。
- **説教の危機があるなら、①説教をやめてしまう、か、②新しくやり直す、かの可能性が含まれる。**
- いずれにせよ、**相変わらず因襲の中に生き続けることは問題にならない。**

説教者という自己同一性

- **「牧師が、もう一度、改めて、説教者になり、み言葉に奉仕す**

るものとして自己を理解するようになる時、そのみ言葉を捉えることによって、自分の自己分裂を克服し、「単一」になるということも可能。

- 聞くということの中で、み言葉は、説教者を支配する力を持ち、そうでなければ、説教者の持つ分裂を克服することになるであろう。
- しかしながら、み言葉は真空においてではなく、教會的また社会的構造の中で聞きとられるものであるがゆえに、作業療法としておすすめしたいのは、説教学研究やよりよき準備と共に、協力ということである。構造というものは、共同作業によってのみ変革されるからである。
- しかしここでは、ただ作業療法だけでも不十分。牧師が一般的に言って、疲れ果てていることからすれば、そうした協力の中で問い始めなければならないことは、説教者が何をしなければならぬか、ではなく、寧ろ、何をする必要がないか、ということである。説教者となろうとする者は、安息日から始めなければならない。即ち、休息、神が聖としておられる時間から始めねばならない。
- 我々は自分で自分を救済することができないゆえに、説教は、一種の無為から始める。和解の務めは、祭りから生じる。おそらくは、説教者がその自己同一性を失ったのは、日曜日と共にこれを失ったのだとも言い得る。説教者自身が、日曜日の在り方を生きる事によって自己同一性を再び見出すであろう。」